

## 塩の道と安曇野の双体道祖神を訪ねて

藤 由 美

### 1 Once more「塩の道」

私達の会が塩の道＝千国街道を歩いたのは、一昨年（1994）の初夏でした。大糸線信濃大町で下車、「塩の道博物館」を見学した翌日、親の原から南小谷まで歩きました。そのときの旅の報告を鈴木さんが本誌第19号に書いていますので、「塩の道」の概略と歴史については、そちらをお読みいただきたいと思います。

若き日のアルプス登山の思い出も乗せた大糸線の風景、百体観音群の傍らに建つ簡素なスキーロッジでの一夜、そして緑濃い親坂の古道を南小谷を目指してひたすら歩きました。

百体の観音 苔の花衣

老鶯の声ひびき合う 塩の道

この感慨深い旅の印象を、山本会員が詠まれた句です。この旅の翌年（1995）、そして今年も、姫川が豪雨により氾濫し、川沿いの国道や小谷村が大きな被害を受けたことをニュースで知りました。本州中部を横断するフォッサマグナに沿った塩の道が、姫川の下流では、きつい山越えのコースをとっている理由、そして「道」とは自然との接点でそれを維持している人々の努力の歴史であったことをつくづく知らされました。

思い出深い千国街道、そのうちの一昨年回れなかったもう一つのハイライト、「佐野坂」を歩きたいという会員の声があり、塩の道の続きと安曇野の双体道祖神めぐりもという希望で、今年の旅行計画はスタートしました。ただし、今回は貸し切りバスとリゾートホテル利用というデラックス旅行、さてどんな道中になることでしょう。

### 2 分水嶺「佐野坂」の観音様達

6月8日（土）早朝6時半、やや曇りがちの天気でした。今日は梅雨入りかというニュースを聞きながら、会長以下15名の会員が勝田台からバスで出発。順調に都心を抜けたものの、やがて荒井由美の「中央フリー・ウェイ」で「右に見える競馬場 左はビール工場」と歌われた府中付近で一時行楽渋滞に会う。

甲府盆地をスムーズに走り、諏訪ー岡谷を抜け、豊科ICを出ると、そこはもう安曇

塩の道と安曇野マップ



野、北アルプスの眺めの良いドライブインで昼食となりました。

若い頃読んだ臼井吉見の『安曇野』の一説、「朝礼の校長訓話は、常念岳の話に限られていた。…常念を見ろ 今朝はご機嫌がいい…常念を見ろ 今朝はあいにく姿を見せてくれないが、よく勉強して明日の朝お目にかかろう。」のフレーズを思い出す。この日も常念は、梅雨前線の雲に隠れているけれど、そう「明日の朝お目にかかる」のを楽しみにすることにしました。光まぶしい安曇野から山道に入ると、だんだん曇ってきて、やがて青木湖から佐野坂にバスは入っていきます。佐野坂は、姫川の源流である青木湖沿いの峠で、塩の道の糸魚川―大町間の分水嶺に当たり、西国三十三観音が祀られています。

この佐野坂の古道は、国道148号線と鉄道が湖の対岸を走っているため、幽玄な趣がよく残っていましたが、作今はスキー場用の林道としても使われているもよう。バスは湖畔ぎりぎりの林道を見事なハンドルさばきで古道入口まで入ってくれ、私達は佐野坂の一部、九番から一番までの観音様を拝観しながら下り道を歩くこととなりました。

この坂は、糸魚川から大町へ塩を運んだ牛方が数々の難所を経て最後に登る峠で、やさしい観音様に見守られつつ、力をふりしぼって登ったのでしょうか。文政年間の銘が多いようで、どの観音様も童女のようなとてもあどけない顔立ちです。寄進した佐野地区の人々と、彫った高遠の石工のおだやかな気質を見るようです。



塩の道・佐野坂にて



佐野坂三番・千手観音

神秘的な湖水を深い木立越しに見る佐野坂、スキー場開発の傷跡がないわけではありませんが、できれば一番から三十三番まで通して歩きたいと思うほど魅力的な古道でし

た。

### 3 白馬村飯森の長谷寺

バスで国道147号線を更に進むと、分水嶺の佐野坂でブロックされていた梅雨前線に踏み込んだように、どんよりとした空です。やがて豪雪で名高い白馬村に入っていきます。

「佐野村より白池迄十四里の間、十月より三月末まで雪ニテ牛馬之通無」と正保図に注記のある地域ですが、今はスキーの大リゾート地になっています。私が25年前、夜行スキー列車で降り立った駅の名は「白馬（しろうま）」であったと思うのですが、牧野副会長の世代では「信濃四谷」であったそうです。ちなみに「代かき馬」の雪形にちなんだ「白馬岳」は、リゾート開発とともに「ハクバ」となり、ずっと前から駅名も村の名も「ハクバ」と読むようになったといえます。

飯森は白馬駅の一つ手前の集落で、民宿のほかはまだ大規模な開発の手が入っていない落ち着いた「塩の道」の村です。庚申塔と道祖神の見守る小さな道を入れて行くと、大きな杉並木の根元で、長谷寺の御住職が私達を待っていただきました。

示現山長谷寺は、仁科氏の支族飯森城主盛春が、戦国時代に中興したという中世禅宗の様式を今に伝える寺院で、三間一戸の楼門が風雨にさらされながらも、雄々しい姿で建っていました。御住職の案内で庫裏の玄関を入ると、昔の重厚さをそのまま活かした丁寧な改修が施されていて、今はストーブが置かれている大きな囲炉裏が、雪国の寺らしく私達を迎えてくれます。



長谷寺の庫裏と本堂（右）

本尊をはじめ中世の彫像が数多く今に伝えられているとのことでありますが、私達が最も印象深かったのは、本堂と庫裏の壮大な造りでした。御住職が特別に案内して下さった庫裏の屋根裏は、合掌造りのように雪国の重い屋根を支える太い梁と柱が幾重にも組み合、かつては、照明を消すと真っ暗な空間をこうもりが飛び交い、また、吹雪の翌朝には粉雪が舞い込んでいたとのことです。今は改築の際防火と保温のために天井を張ったが、以前は庫裏の囲炉裏の幾百年もの煙が屋根裏を守ってきたのでしょうか。改築時にあえて屋根裏に通路と照明を設置して、見学者を案内して下さる御住職の姿に、風雪の中で代々堂宇と法灯を守り伝えてきた誇りのようなものが感じられました。

庭園に面した座敷で心尽くしの茶菓をいただきながら、御住職の法話を拝聴し終わるころ、気がつくとい庭の水芭蕉の大きな葉を雨が叩いていました。雨の中、御住職にお見送りいただいて長谷寺を後にし、私達は次の見学先へと急ぎました。

#### 4 大町の酒の博物館から穂高温泉郷へ

大町は博物館の多い町です。一昨年は「塩の博物館」をじっくり見学したので、今回は大町温泉郷にある「酒の博物館」を見学することにしました。宮尾登美子の「蔵」がテレビで放映されていたときでありましたので、私は昔の酒造りの工程に興味深く見学しましたが、中には良い香りに引かれて、さっさと「きき酒コーナー」に急ぐ方もあったようです。北アルプスの水と安曇野の凍るような冬の寒さが、伝統ある酒造りを支えてきたということですが、良質なお米はもちろん、各工程の大変な労力と技術のかけ方に、お酒も塩と同様に貴重で贅沢な商品であったことを感じました。

この日の見学はここで終わり、更に国道を穂高まで戻って、穂高温泉郷のホテル「ピラ安曇野」に入ってくつろいだ一夜を過ごしました。客室に安曇野の遅い春を待ちわびる心を歌った「早春賦」の歌碑の拓本が飾られていました。早速、元女学生の会員は、練習を開始し、夕食の食堂に可憐な(?)コーラスが響きました。

#### 5 早朝の松尾寺を訪ねて

翌朝目覚めると、夜来の雨はほぼ上がりかけていて、朝食前に松尾寺を見学することになりました。ホテルの左隣の公園の小高い所に「鏡の鳴る丘」の木造洋館・有明高原寮が復原されています。花の咲き乱れた公園の小道を登っていくと松尾寺の参道から山門へ入って行き、花園の中の水車小屋の風情を楽しみながら、苔むした石段を登り詰めると深い木立ちの中に松尾寺の本堂の薬師堂が鎮まっていました。

寄せ棟造り方三間の簡素なお堂ですが、室町時代の特徴を残す重文建築であります。深い軒を支える軒支柱から五間堂の形式とも思われる点で、どこか村上の正覚院釈迦堂とよく似ています。ただ、後代に軒支柱で補強した正覚院のお堂とは違って、松尾寺本堂は建築当初から軒支柱があったことであり、佐野坂以南とはいえ、雪の多い山国の冬の気候に合わせた建築様式であると思われました。



松尾寺の本堂の薬師堂

同じ公園内には、穂高町郷土資料館もあり、朝の清々しい気分の中で出発前の散策を楽しむことができました。

## 6 安曇野の大社穂高神社

松本盆地は、佐野坂と塩尻の間の長い盆地です。北に大町、南は松本（府中）の街が栄え、その中央の広い平野部は、古代開拓の祖・安曇族に由来して「安曇野」といわれてきました。

安曇族は、北九州の渡来系氏族である「わだつみの民」といわれ、また、その祖神である穂高見命は、北アルプス連峰の最も俊秀な名山である穂高神岳に垂跡したと伝えられています。その奥の宮は、その姿が最も神々しく望める徳本峠を更に越えた上高地の明神池にあり、里宮は安曇野の中心である穂高神社となっています。

霊山と崇められた山で近代まで人を寄せつけなかった山は、この穂高岳だけであったかも知れず、その山の名は、一時山登りに熱中していたころの私にもあこがれに似た響きを持っていました。この霊山の名を持つ神社が、海人の神事を今に伝えているのは、以前からとても興味深いことでありました。



穂高神社にて

バスでホテルを出発した私達は、早速、穂高神社の御舟会館へ行きました。9月の例大祭のときは船形<sup>だし</sup>の山車に豪華な穂高人形を飾った大小の御舟が幾艘も引き回され、そのきらびやかさは歴史絵巻を見るようであるといえます。さらに、遷宮祭では境内の森を背景に人形飾り物が展示され、それは映画の一場面のような迫力であるといえます。

会館では、その御舟と人形の飾物を実際に見ることができました。いずれの大作も、地区ごとにその都度作られるとのことですが、安曇族の末裔達のエネルギーは大変なものであると思いました。

案内をしてくださった清楚な巫女さんに「この里宮からなぜ穂高岳が望めないのですか」という長い間のナゾをお聞きしたのですが、「穂高町から穂高はどうしても見えませんね」とのお答えでした。後で調べてみると、この里宮は古墳の上であり、周囲は古代遺跡の宝庫であるとか。また、この里は、山地からのたくさんの川が高瀬川と穂高川に合流する湖のような水の豊かな地域であり、操船と治水にたけた安曇族が開発の拠点

としたため、里宮はその功労ある開祖の墳墓に置かれたものでしょう。

山国安曇野の人々は、普段は有明山や常念岳を拝みながら、穂高神社の祭礼を通して山のあなたの遠き穂高明神岳と、諏訪の湖より広大な外海へのあこがれを持ち、先祖への畏敬の心を伝えてきたのであったと思います。

## 7 双体道祖神めぐりと満願寺

穂高神社本殿に参拝後、いよいよ今回の旅の第2のハイライト、道祖神めぐりに出発です。私が双体道祖神に初めて出会ったのは25年前、ハツ岳や美ヶ原など初心者向きの山行きを始めたころです。当時、バスの便が悪く、山麓まで里道を歩くことがありました。旧道を広い舗装道路に変える工事も盛んで、今にもダンプにつぶされそうな道祖神を村人達が道の傍らに移し、供え物を手向けている光景にでくわし、立雛のレリーフのように見えた男女の石像が「道祖神様」であると教えてもらったのが最初であったように思われます。旅といえば、信州か群馬の山歩きばかりしていた私にとって、双体道祖神は最も親しみやすい道の守り神となり、近年、当会に入ってから北総の道を案内されてよく出会う青面金剛像のほうがむしろ異様に感じられたものでした。（それでも、数は少ないでしょうが、大佐倉にも双体の道祖神があったのには驚きました。）

今回訪ねた穂高町は、道祖神の宝庫といわれるほど、いろいろな双体道祖神が村の境や辻々に立っています。数百メートルくらいおきにあるので、自転車で回るのが便利なのでしょうが、ツーリストの安藤さんの奮闘により、町の南西部を中心にバスで回ることになりました。

のどかな田園風景の中に、双体道祖神、大黒天、二十三夜塔、庚申塔の4基がフルセットで並ぶところ、又は、道祖神のみや大黒天のみどころ、道祖神も双体像と文字碑の2種類があるなど、実にさまざまであり、穂高町の道祖神はなんと125基もあるそうです。

年号の古いものとしては、常盤町の享保16年（1731）の銘があるということですが、今回見て回ったのは、享和元年（1801）から明治の初め（1872）ころまでで、彫りが深く、表情豊かなのは文政から天保（1820～1840）にかけてのものが多いようでした。また、王朝スタイルの



安曇野の田園に祀られた大黒天

男女が手を握り合って立っているのがほとんどでありましたが、酒器を持っているおめでたい像もいくつかありました。

道祖神をめぐりながら常念山麓の牧村へと登っていくと、草深という所に徳本念仏塔（徳本上人独特の書体による「南無阿彌陀仏」の名号塔。本誌第11号参照）がありました。さらに、上にある十返舎一九が通った山沿いの古道と交差する山崎の辻に、天保12年の大きな道祖神があり、その横に二十三夜塔、庚申塔、大黒天の立派な文字碑とともに、4基揃って立っていました。



山崎の双体道祖神等

さらに、バスが山道を登ったところに、栗尾山満願寺がありました。「信濃高野」と呼ばれる真言宗のお寺で、江戸時代には安曇と筑摩の両領民の総菩提所であったといえます。下に経文が書かれている微妙橋が美しく、その橋を渡って苔むした170段の急な石段を登り詰めたところに、山門と本堂、聖天堂、つつじ園がありました。本堂は丁度修



満願寺の微妙橋



聖天堂

理中でしたが、明治28年築の聖天堂は、その優雅な中に力強さを感じられる名建築であるということでした。本堂下のつつじ園は、安曇野と筑摩山地の山並みの展望と花園の美しさが息を飲むように見事でした。

バスは再び道を東へ下り、道祖神をいくつか見ながら柏矢町方面へ抜けていきます。一口に双体道祖神といっても、顔料で賑やかに彩色されたものや、表情とかスタイルが様々に異って



柏矢町の街中にある彩色の双体道祖神



いることに気付きました。

楽しく見学しているうちにお昼を過ぎ、そろそろ帰るころになっていました。往路に寄った豊科ドライブインで昼食をとり、長野自動車道に乗り、安曇野を後にしました。

## 8 路傍の守り神と庶民の祈り

古い道、峠道、細い辻、今も賑やかな交差点、およそ人の行き交う道や辻には、東西を問わずいろいろな道の守り神が祀られています。それは、毎年新しく作られる木や藁のものもあれば、何百年も前から人や車の往来、風雪に耐えてきた石像、石碑があります。お地蔵様、馬頭観音、青面金剛、大黒様、そして男女の双体道祖神等々。その宗教的背景も、仏教や道教、インドの神々、記紀神話の神々などが習合しています。また、その目的も、村境を悪霊から遮る呪いに加えて道の安全を祈り、人の一生を旅に例えて良縁、夫婦和合、子育てと豊かな生産を願うものになっていたり、他界へ旅立った人馬の供養や道行く旅人行先や里程を示して励ましとなっているものなど、さまざまのようです。

北総の私達の街にも、陸奥の果てや京の街角にも、山深い信濃にも、それは共通し、古道の辻のほとんどが、人々の祈りの集積所となっていました。また、同じ信濃でも、里の境を出てしまうと死出の旅とは分かち難いような山道の多い塩の道と、豊かな安曇野とでは、並べられている石像に大きな違いがありました。

塩の道では、親の原の百体観音、佐野坂の三十三観音など遠い国の霊場めぐりになぞらえられた石仏群や、供養のための馬頭観音、六地蔵などの石仏が多く建てられていました。これに対して、里の安曇野では、厄を除け福を招く双体道祖神や大黒天が祀られていて、人々の生活の実態が道にも反映されているように思われました。

このように、様々な道の守り神の中で、仏教、道教、インド神等の影響と無縁に思われる双体道祖神のルーツは何であったのでしょうか。江戸時代中期から、長野、山梨、神奈川県を中心に広く建てられた双体像の原形は、意外にも縄文時代の生殖のシンボルを崇敬する原始宗教に集約されるといいます。

今年の夏、縄文のふるさとの青森に旅をしましたが、三沢市歴史民俗資料館で見た男女の対の藁人形は、7月7日の7日盆に家々の門口にたてかけ、13日に村の境に送り出す人形送りの形代かたしろであると聞きました。ねぶた流しの行事や千葉県の佐原市の虫送りと似ているようにも思われましたが、女神は髪を長く、男神はまげを結ったその対の人形

には、どこか双体道祖神と共通するものを感じさせられました。

縄文時代の石棒→陰陽石→双体石像という流れと、土偶・木偶→人形送り→流し雛→雛人形という流れは、どこかで交差するところはなかったのでしょうか。

穂高町の道祖神には、小正月の1月15日、性の柱ともいわれる「三九郎の御柱」が立てられ、子供達によってそれに火をつけて焼く祭りが行われます。

近世は、庶民文化が花開き、人間の喜怒哀楽がそのまま文芸に表現され、津々浦々に国学が浸透していった時代でもあります。性のシンボルを石をもって祭る民俗と、人形に厄を移して送る流し雛などの風習が、江戸時代に、両者とも復古的な公家風の装束のみやびな男女像に変わっていったのは、偶然なのでしょうか。近世は、また、庶民が現世と後世の救済を求めて観音や地蔵を信仰し、そのあかしとして石仏をたくさん残した時代でありました。人間としてごく自然な「愛のかたち」を里の路傍の石に刻んだ石工の技、そして、街道とはいえ村里すなわち現世の境を出た山道に観音様や地蔵様への救いを石仏に込めた村人の心、その技と心を伝える道の守り神が、車社会の現代にあっても、いつまでも私達を守ってくださるようにと祈らずにはられません。

#### 参考文献

『古道紀行 塩の道』 小山和著 保育社

『塩の道・千国街道』 田中欣一編

『道祖神は招く』 山崎省三著 新潮社

『信濃の道祖神』 田中康弘著 信濃路

『北安曇の道祖神』 牛込嘉人著 柳沢書苑